三途の河の深さ

令和四年九月法話　薬師寺 管主　加藤朝胤

閻魔（えんま）

閻魔様は佛教、ヒンズー教などでの地獄、冥界の王として死者の生前の罪を裁く神
日本の佛教においては地蔵菩薩の化身

インドでは、古くは生前によい行いをした人は、天界にあるヤマの国に行くとされています。そこは死者の楽園であり、長寿を全うした後にヤマのいる天界で祖先の霊と一体化することは、理想的な人生だと考えられていました。

しかし後代には、赤い衣を着て頭に冠を被り、手に捕縄を持ち、それによって死者の霊魂を縛り、自らの住処・国に連行されると考えられていました。

ヤマの世界は地下だとされ、死者を裁き、生前に悪行をなした者を罰する恐るべき神と考えられるようになりました。

骸骨の姿をした死の病魔で、ついには単なる死神としても描かれるようになりました。

中国に伝わると、道教における冥界・泰山地獄の主である泰山府君と共に、冥界の王であるとされ、閻魔王、あるいは閻羅王として地獄の主とされるようになりました。

日本では、本地である地蔵菩薩は地獄と浄土を往来出来るとされています。

閻魔王の法廷には、浄玻璃鏡という特殊な鏡が装備されていて、この魔鏡はすべての亡者の生前の行為をのこらず記録し、裁きの場でスクリーンに上映する機能を持ち、裁かれる亡者が閻魔王の尋問に嘘をついても、たちまち見破られるという司録（しろく）と司命（しみょう）という地獄の書記官が左右に控え、閻魔王の業務を補佐しています。

平安時代の公卿 小野篁は、閻魔大王の下で裁判の補佐をしていたという伝説があります。

閻魔王は蒟蒻が大好物であるという俗説があり、そのため各地の閻魔堂で蒟蒻炊きの行事が行われています。

【十王】じゅうおう『十王経』に説く、冥界の十王。秦広王・初江王・宋帝王・伍官王・閻魔王・変成王・泰山府君・平等王・都市王・五道転輪王。〈『反故集』〉

【閻魔王】えんまおう 閻摩王・閻羅王とも書く。仏典では閻摩と書くほうが多かったが、シナ・日本では一般に閻魔と書く。死後の世界の支配者で、亡者を裁く者。死者の罪を裁く地獄の主。冥界の王。もとインドのバラモンから入ってきたもので、また餓鬼界の主、地蔵菩薩の化身などと考えられ、種々の説がある。シナ・日本では裁判官である十王の一人としてシナの風俗や道教の影響を受けている。密教では焔摩天といい、形容は異なる。Ⓢ Yama-rāja

【俱生神】くしょうじん また同生神ともいう。人の出生とともに生じて人の善悪を記す神。人が生まれるとともにしたがって、その人の善悪の行為を記録して閻魔王に報告する神。『法華経』には同生・同名の二神といい、吉蔵の疏には、「同生は女神で人の右肩に、同名は、男神で左肩にある」と記している。後の信仰によると、男女の二神で各個人とともに生まれ、常時その人の両肩にいて善悪の行為を記録し、その人の死後、その記録を閻魔王に奏上する。また閻魔王の持物である人頭幢に混じ、また地獄の獄卒とも混じる。〈『薬師本願経』〉〈『薬師経古迹』下〉〈『沙石集』七〈七〉〉〈『妻鏡』〉〈『反故集』〉

【獄卒】ごくそつ 地獄の鬼。そこに生まれてくる悪人を苦しめさいなむ鬼。→地獄卒 Ⓢ naraka-pāla〈『倶舎論』二巻七オ：*AKbh.* p.164〉。〈『往生要集』大八四巻三上〉＝Ⓢ puruṣāḥ〈『倶舎論』二巻七オ：*AKbh.* p.164〉〔解説〕地獄の獄卒（Ⓢ naraka-pāla）は有情であるかどうかということがアビダルマ教義学において大いに問題となった。ある人びとは、彼らは有情ではないと主張した。ではどうして動作をすることができるのか、ということが問題となるが、それは宇宙成立時期（Ⓢ vivartani）に起こる風のようなものである。つまり、彼らは独立の生存主体ではないが、ひとりでに活動を起こすというのである。すなわち、死んでからやって来る有情を地獄に投げこむ者どもは有情であるが、地獄の中で有情を害し、殺す獄卒は実の有情ではない、と解釈している。〈『倶舎論』二巻七ウ〉

【有情】うじょう ①生命をもって存在するもの。生きもの。生あるもの。感情や意識を有するもの。古くは衆生と漢訳し、玄奘以後の新訳では有情と漢訳する。情は心の意。一切の生類の総称。無感覚な草木・山河を非情とか無情とかいうのに対していう。Ⓢ sattva Ⓣ sems can〈*AK.* II, 41; III, 4〉〈『倶舎論』二六巻一オ：*AK.* VIII, 30〉Ⓢ sattva〈『弁中辺論』弁相品 大三一巻四六四下：*MAV.* I, 3〉〈『金剛針論』大三一巻一七一中〉〈『瑜伽論』一六巻 大三〇巻三六三上：*PG.* K. 4, p.168〉〈『理趣経』大八巻七八四下〉〔『理趣経』読誦のときは「ゆうせい」とよむ。〕〈『集異門論』巻一 大二六巻三六七中〉。〈『往生要集』大八四巻四三上〉〈『徒然草』一二八段〉②生存主体。ほぼ霊魂に同じ。Ⓢ sattva〈『有部律破僧事』七巻 大二四巻一三六上：*CPS.* S. 354〉〈*MAV.* 玄〉Ⓢ pudgala〈*MAV.* 玄〉③人びと。Ⓢ jagat〈*AK.* III, 38〉。〈『山家学生式』大七四巻六三四上〉④有仏性の意。仏性ある者。〈『開目鈔』一巻五八八〉＊〈『倶舎論』五巻一三、一〇巻二二一一四、一三巻三一五など〉＊〈『沙石集』五本（一）〉＊〈『反故集』〉＊〈『人となる道』〉＊〈『玉かがみ』〉〔解釈例〕情識を有すると云ふ事。情識はこころなり。〈『香月』二七四二〉

【地獄】じごく 地下にある牢獄の意。苦しみのきわまった世界。現世に悪業をなした者が、死後その報いを受ける所。罪業の結果として報われた生存状態、および環境。三悪道・五趣・六道・十界の一つ。経論によって種々に説かれるが、無間・八熱(八大)・八寒・孤独などの地獄があり、八大または八寒地獄の一つ一つには、十六小地獄(十六遊増地獄)があり、みな閻浮提の下、二万(または三万二千)由旬の所にあるといわれる。黒沙・沸屎・鉄釘・饑餓・渇・一銅鑊・多銅鑊・石磨・膿血・量火・灰河・鉄丸・釿斧・豺狼・剣樹・寒水の各地獄で、この中で筆舌に尽くせない苦しみを受けるという。

〔解説〕地獄に関する経論の所説もいろいろである。はじめのうちは地獄をただ数え立てるだけであったらしい。古い経典である『十八泥梨経』は十八の地獄をただ数え立てて説明するだけである(『十八泥梨経』㊀一七巻五二〇―五二三、『スッタニパータ』コーカーリヤ経参照)。地獄の体系として『倶舎論』に説くところをその伝統的解釈にしたがって説明すると次のごとくである。(I)八熱地獄(Ⓢusṇā aṣṭau mahānarakāḥ)。(1)無間地獄(阿鼻地獄 Ⓢavicir mahānarakaḥ)。苦しみを受けることが絶え間がない(無間である)から、また楽の間まじることが無いがゆえに「無間」と名づけるというが、語源は不明であり、おそらく通俗語源解釈にもとづく解釈であろう。(2)極熱地獄(Ⓢpratāpanaḥ narakaḥ)。内外自他の身がともに猛火を出して互いに相燻害するがゆえに名づける。(3)炎熱地獄(Ⓢtāpanaḥ〔narakaḥ〕)。火が身についてまわり、炎に身が焼かれてその熱にたえがたいがゆえに名づける。(4)大叫地獄(Ⓢmahārauravaḥ〔narakaḥ〕)。はげしい苦しみに迫られて大きな叫び声を発し、悲しみ叫ぶので名づける。(5)号叫地獄(Ⓢrauravaḥ〔narakaḥ〕)。多くの苦しみに迫られて悲しみの叫び声を発するので名づける。(6)衆合地獄(Ⓢsaṃghātaḥ〔naraka:kaḥ〕)。多くの苦しみが集合して身に迫って身をそこなうので名づける。(7)黒縄地獄(Ⓢkālasūtraḥ〔narakaḥ〕)。まず黒縄(悪の業)をもって身体手足を縛り、後に切り刻むので名づける。(8)等活地獄(Ⓢsaṃjīvaḥ〔narakaḥ〕)。衆苦が身に迫り、悶えることは死するがごとくであり、ついでもとのようによみがえるので名づける。

【極楽】ごくらく また、安養・安楽国・無量寿仏土・無量光明土・無量清浄土・蓮華蔵世界・密厳国・清泰国ともいう。阿弥陀仏の浄土。単に浄土ともいう。西の方に向かって、十万億の仏国土を過ぎたかなたにあり、もろもろの苦しみがなく、ただ楽しみ(Ⓢsukha)のみがあり、阿弥陀仏はここにいて、常に説法しているという。『阿弥陀経』には、この浄土のすがたを細説するが、今もなお阿弥陀仏はここにあって説法するという。この国に生まれる人は、さまざまな楽しみを受けるといわれる。たとえば、身に仏のような三十二相や神通を得、五官の対象はすべて微妙で快く、心のままに法を聞き、仏に供養し、さとりが開けるといわれる。ただこの浄土には、辺地・疑城・胎宮などといわれるはずれがあって、阿弥陀仏の救いに疑惑をいだくものがここに生まれるという。幸あるところ。〈『阿弥陀経』〉〈『称讃浄土経』〉〈『秘蔵記』上〉〈『天台弥陀経義記』〉〈『九字釈』〉〈『栄華物語』一五巻うたがひ〉〈『教行信証』信巻、真仏土巻〉〈『歎異抄』三〉〈『一遍語録』七、誓願偈文〉〈『覚海法語』〉〈『玉かがみ』〉〈『沙石集』七(一八)〉〈謡曲『卒都婆小町』〉

〔表現例〕いまいきのくに。Ⓢsukhāvatī

じ・ごく:ヂ【地獄】①〔仏〕(梵語 naraka 奈落、niraya 泥梨の訳)六道の一。現世に悪業をなした者がその報いとして死後に苦果を受ける所。贍部州の地下にあり、閻魔が主宰し、鬼類が罪人を苛責するという。八大地獄・八寒地獄など、多くの種類がある。↔極楽。②〔宗〕(Infernus キリスト教思想で、救われない魂が陥るという世界。カトリック教会では、苛責によって浄罪されたのち昇天を許される煉獄(プルガトリオ)と永劫の罰責をうける地獄(インフェルノ)とがあるとする。↔天国。③比喩的に、非常に苦難な境地。「受験―」「交通―」④火山・温泉地などで、絶えず煙や熱湯がふき出している所。⑤密淫売婦。私娼。⑥劇場の奈落。**―・あみ**【地獄網】①振縄の一種と思われるものを用いた網漁。(慶長見聞集)②魚を捕る壺網や筌。また、鳥を捕る袋網。**―・え**ェ【地獄絵】地獄で罪人が苛責にあうさまを描いた絵。枕八一「―の屏風」**―・おとし**【地獄落し】ネズミ取りの一。ネズミが餌を食おうとする途端に、上から押えの板が落ちて打たれて死ぬようにしたもの。↔極楽落し。**―・おぼえ**【地獄覚え】人が忘れて欲しいようなことを意地悪く覚えていること。↔地獄耳。**―・さま**【地獄狭間】弓・鉄砲を打ち出すために、城壁の塀と石垣とが接する所に設けた方形の穴。**―・ぞうし**:ザウ【地獄草紙】仏教経典に説かれた地獄の種々相を描いた絵巻。和文の詞を添える。一二世紀末の作。現在四巻と模本二種が伝わる。六道思想に根ざし、来世の恐怖を実感的に描き出す。**―・ちょうちょう**テテフ【地獄蝶蝶】クロアゲハの異称。関東地方でいい、捕獲を嫌う。**―づめ**【地獄詰め】地獄で罪人を詰めるように、ぎっしりむごく詰め込むこと。**―・どう**ウダ【地獄道】地獄を六道または五道の一としていうときの語。**―・ばら**【地獄腹】女児のみ産む女をののしって呼ぶ語。**―・へん**【地獄変】地獄変相の略。亡者が地獄で苦しみを受ける光景を描いた絵図。(書名別項)**―・ほぞ**【地獄枘】〔建〕仕口の一。枘に楔をなかば打ち込み、後にこれを他材にさしこむもの。楔は枘に、枘は蟻孔に入って拡がり、抜けなくなる。地獄楔。包込枘。跨枘。↓枘(図)。**―・みみ**【地獄耳】①一度聞いたらいつまでも忘れないこと。強記。②人の秘密などをすばやく聞き込む耳。早耳。伎、小袖曾我「ちらりと聞いた―」。「彼は―だから油断できない」↓地獄覚え

―極楽はこの世にあり 善悪の行いの応報は、あの世を待つまでもなく、この世でもはっきりとあらわれる。

―で仏 危難の時に思わぬ助けにあったたとえ。

―にも鬼ばかりではない 地獄のような辛いこの世にも慈悲深い人は居る。

―にも知る人 地獄のような所にも知己はできる。「獄にも知るべ。地獄の一丁目 破滅や困難に向かう第一歩。

―の上の一足飛び 極めて危険なこと。浄、冥途飛脚「詮議に来るは今の事、―、飛んでたもや」

―の馬は顔ばかりが人 心のきたない人をののしっていう。人面獣心の意。狂、人馬「地獄の馬で顔ばかりが人ぢやといふが」

―の釜の蓋もあく 正月と盆との一六日は閻魔にお参りする日で、鬼さえもこの日は罪人を呵責しないの意。殺生の戒めに用い、またこの日を藪入りとして、住込みの雇人にも休養を与えた。

―の沙汰も金次第 地獄の裁判でも金で自由にできるという、金力万能をいう諺。「より―」

―の地蔵 「地獄で仏」に同じ。浄、油地獄「お吉と見る

―は壁一重 一歩道を踏みあやまれば、すぐに罪悪を犯すに至る。

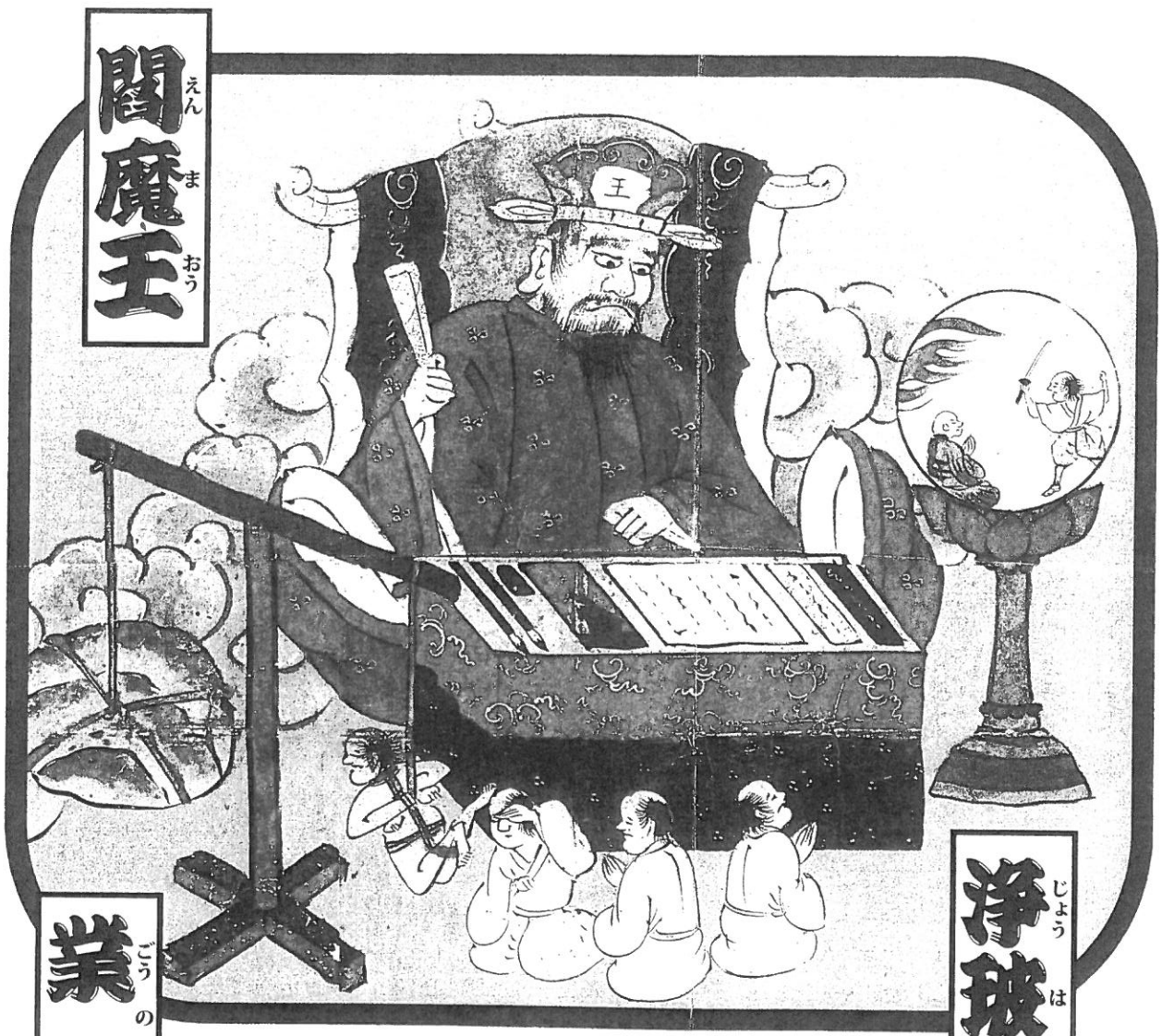
―も住家(すみ)「住めば都」に同じ。

てん・ごく【天国】①神・天使などがいて清浄なものとされる天上の理想の世界。キリスト教では信者の霊魂が永久の祝福を受ける場所をいう。天堂。神の国。転じて、苦難のない楽園。↔地獄。②比喩的に、心配や苦しみのない理想的な世界。「子供の―」「歩行者―」

うん・めい【運命】人間の意志にかかわりなく、身の上にめぐって来る吉凶禍福。それをもたらす人間の力を超えた作用。人生は天の命によって支配されているという思想に基づく。めぐりあわせ。転じて、将来のなりゆき。平家二「当家の―尽きぬによつて」。「こうなるのも―か」「歌舞伎の―はどうなるか」**―・げき**【運命劇】人生の出来事を運命または宿命のなす事と解して描写しようとする劇文学。**―・てき**【運命的】運命として決っているかのように思われること。また、以後の運命を決定する程であること。「―な出会い」**―・ろん**【運命論】(fatalism)一切の出来事はあらかじめ決定されていて、なるようにしかならず、人間の努力もこれを変更し得ないと見る説。宿命論。「―者」↓決定論

うんめい【運命】①ベートーヴェン作曲の第五交響曲ハ短調(作品六七番)の通称。一八〇八年作。②小説。幸田露伴作。一九一九年(大正八)四月発表。明の建文帝の数奇な生涯を描く。

地蔵菩薩と子どもたちのいるところが有名な賽の河原です。傘を差している子ども、遊んでいる子ども、泣いている子ども、太鼓を叩いている子ども、地蔵菩薩の衣にすがっている子ども、いろんな子どもが描かれています。賽の河原は親より早く死んだ子どもが行くとされる地獄ですが、地蔵菩薩が現れて子どもを救ってくれます。



閻魔王の左右には、真実を見極める道具が置かれています。左の業秤は、大抵は重そうな大岩より亡者の方に傾きます。つまり亡者の罪は重いのです。右の浄玻璃鏡は亡者が嘘をつくと、前世に犯した罪が映し出される鏡。その鏡に僧侶に危害を加えようとする姿が映し出されました。真実の姿を見せられた亡者は、恐ろしさのあまり手を合わさずにはいられません。

三途の川を渡る手前にある衣領樹の下に座る奪衣婆。奪衣婆は自分の前を通る亡者から衣を剥ぎ取ります。衣領樹の枝に衣を掛けると亡者の悪業の重さで枝の撓り具合が異なります。善人は三途の川に掛かる橋を渡りますが、悪業が重い亡者は龍や蛇のいる江深淵を渡らなければなりません。

絶世の美女が金扇で男を招いています。その女を求めて、男が大樹を登りはじめると、木の葉は次第に刀の刃になり、しかもその刃がだんだん下を向いて、男の体はずたずたに切り割かれてしまいます。ようやく頂上に着いてみると、女の姿はありません。あたりを見渡すと女は地上にいて、また、男を招いているではありませんか。女を求める男は、同じことを繰り返しています。異性への欲情の激しい者が堕ちる刀葉林という地獄です。